



7月9日(月)、名向小5年生が、真珠の核入れに挑戦しました。

当日は、神奈川県桐谷教育長をはじめ教育委員会のみなさんや、吉田市長、三壁教育長はじめ三浦市役所の皆さん、日本財団、東京大学海洋アライアンスの方も、授業の様子を視察されました。

最初に、小パール隊の皆さんから、詳しい説明があり、その後、核入れ体験が始まりました。一人ひとりが、緊張した面持ちで、小パール隊の方たちの指導を受け挑戦します。一人が2個ずつのアコヤガイに、核入れをしていきました。体験を終えた子どもたちのほとんどが、「緊張した」「難しかった」と、うれしそうに話しているのが印象的でした。

最後に、何人かの児童が、代表して授業の感想を話す場面があり、「真珠の養殖がこうやって行われているのが分かってよかった」「今日はこんな体験をさせていただいてありがとうございました」などの声がありました。



今回核入れされたアコヤガイは、小網代湾に戻され、そこで約10か月育てられ、来年の5月頃に、子どもたち自身の手で取りだされる予定です。

授業見学の後、視察された皆さんで懇談が持たれました。最初に、三浦市の海洋教育についての説明が行われ、その後、授業についての感想に移りました、「子どもたちが、あんなに真剣な表情をするのは、なかなか見られない」「地域の連携が素晴らしい」等のうれしいことばもいただきました。



6月29日(金)に、みうら学研究会兼海洋教育研修会が行われました。講師は、東京大学海洋アライアンス海洋教育促進研究センターの田口康大特任講師でした。テーマは、「故郷」を形作る営みとしての海洋教育、ということで、三浦市にとって、タイムリーな内容でした。

冒頭、三浦市の場合、海洋教育に地域の様々な思いを込めやすいという特徴があることが示されました。そもそも、子どもたちが育つには、社会とのつながりを育むことが必要であり、学校は失敗ができる場であり、世界(社会/自然)と自分をつなぐ自分なりの表現方法を獲得・蓄積する場所ととらえていると述べられました。



海洋教育において教師は、専門家になることより、様々なものごとに海とのつながりを見いだせることが大事であり、カリキュラムマネジメントの面でいえば、カリキュラムを「海」という視点で見直してみることが大事だということです。そして、それぞれの人が、自身の「ふるさと」を形作る営みとして、三浦市にとっては、海洋教育が有効だという指摘がありました。「みうら学」の重要性も、今回の講演で裏付けられたと思います。

(文責 事務局長 渋谷)

海洋教育に関するお問い合わせは、みうら学・海洋教育研究所 854-9443 まで